

おおさか  
KEY  
ワード  
第19回

# 御堂筋

## のレジェンド

伝説

散歩にいきたい  
黄葉の季節



できたばかりの堂々たる御堂筋 中央右に市役所旧庁舎  
(所蔵:大阪市都市工学情報センター)

半世紀も昔、私は親父に連れられ“御堂筋パレード”を見た。府が財政難で中止した現代の御堂筋パレードではない。大阪中が熱狂した“伝説”の“御堂筋パレード”である。

昭和34(1959)年、難波の大阪球場(現なんばパークスの場所にあった)を本拠とする南海ホークスは、サブマリンの豪腕、杉浦忠が讀賣ジャイアンツを相手に日本シリーズで連投し、初戦から四連勝して敵地後楽園球場で優勝した。この年の杉浦の成績は、38勝4敗(勝率9割5厘)という超人的なもので、凱旋を祝って10月31日、名将・鶴岡一人監督を先頭に、ホークスの選手を乗せた11台のオープンカーが、紙吹雪が舞い、熱狂した市民20万人が声援を送るなか御堂筋をパレードした。今は本拠地を移したホークスだが、戦後復興した大阪にあって、東京のチームを小気味よく粉砕したことで街全体が喚呼の声に包まれたのである。

復興から高度成長期「なにくそ、がんばるぞ」という勇気を大阪人に与えたホークスの優勝。私は二歳でほとんど記憶しないが、大阪で独立して商売をはじめたばかりの親父も燃え、見物に連れて行かれたらしい。

勝利のパレードの舞台である御堂筋も、また“伝説”というべき大通りである。文献には大坂夏の陣の直後に名が登場するらしいが、近代的な都市幹線道路として完成したのは、第七代大阪市長の關一(1873—1935)による一連の都市計画の結果である。大正15(1926)年から拡幅工事が行われ、堂島川に大江橋、長堀川に新橋、道頓堀川に道頓堀橋が架橋され、翌年5月に道路が完成する。「市長さんは船場のまん中に飛行場でも造りまんのか」と揶揄されたという。地底には地下鉄の建設も進められた。この辺

りは幅6メートルほどの淀屋橋筋があったが、拡幅によって北御堂(本願寺津村別院)と南御堂(真宗大谷派難波別院)が並んだことで「御堂筋」となった。

全長4,027メートル、幅43.6メートル、全6車線の大動脈。昭和45(1970)年の大阪万国博覧会を機に、梅新交差点より南の全車線が南行きの一方通行となる。これだけ広い道路が一方通行であることを、東京から遊びに来た大学の友人が驚き、少し誇らしかった思い出がある。

御堂筋を散歩すると、戦前の大阪の黄金期を実感できる。たとえば建築だ。日本銀行大阪支店、日本生命本社ビル、安井武雄設計の大阪ガスビルディング、ヴォーリズ設計の華麗な大丸心齋橋店、突き当たりには壮麗な高島屋大阪店の南海ビルがある。戦後建築だが、難波の新歌舞伎座(閉館)も村野藤吾が設計した名建築だ。これらの建築もホークスのパレードを祝ったはずである。

さらに御堂筋には、この街で生きる人のところをくすぐる歌がある。欧陽菲菲「雨の御堂筋」、海原千里・万里「大阪ラブソディー」がそうだし、上田正樹・有山淳司の「梅田からナンバまで」も好きだ。雨が降るイヤな天気だけれど、傘をさして彼女と梅田から難波まで御堂筋を散歩しましょうという歌詞だが、金はないけどそれはそれ、といった気分で都心を飄々と歩く若者のリラックスしたムードが実にいい。

御堂筋沿道の約900本近いイチョウ並木。本紙のタイトルも、御堂筋のイチョウから採られたものだ。モダン建築や沿道に設置された彫刻などを眺めながら、“黄葉の御堂筋”を、気分も新たに散策しなおしてはどうだろうか。